
IS fusion

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S f u s i o n

【Nコード】

N 6 6 7 9 Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

タイトル通り、本編とオリジナルの融合。オリ主 久遠祐希が加わったISの世界・・・彼女もまたある意味の天才だった。IS学園に入学し波乱万丈の物語が始まる！

なおこの作品えらく頻繁に他作品を引用します。その都度助言しますがご理解を。

設定・注意（前書き）

テスト前だが気にしない。

というよりは気にもしない。

テストは金曜日

設定・注意

こんばんわ。今から投稿していくのはIS<インフィニット・ストラトス>を元にしたオリ主を加えた小説です。小説自体初めて書くので多目に見てくださいれば有り難いです。なお、文中のキャラや機体、世界設定について自分が愛読しているお気に入り小説を参考・もとい引用させていただきます。その際は前書き、後書きで備考として入れていきます。

そんなこんなで始めたいと思いますのでよろしくお願いします。

あ、あと自分は高1ですのでテスト等で不安定となります・・・それでも読んでくだされば光栄です。

目標は、

「自分のお気に入り小説の融合」です。

それでは次回からよろしくお願いします。

一話 興味の対象（前書き）

勉強するやる気がない

テストはできないひとがすねばいいといつも思う

一話 興味の対象

私は今歩いている。
何処へって？

友人の家にです。私の最初の友達、篠ノ之箒と遊ぶ約束をして今向かっている。

私は毎回おもうのだけど、箒の姉さん、東さんはいつも無表情・冷酷：
徹：

今となつてはあまり気にしなくなつたけど、それがただ単に興味の対象じゃないからだそうだ。

それはさておき到着！呼び鈴ならして少し待つ。そして、

「祐希早かったな、あがつていいよっ！」
箒ちゃん登場！！

「うん！ありがとっ！お邪魔します。」

私は久遠祐希^{ひさのちゆう}8歳。小2。

まあ、自己紹介はおいといて、靴を脱いで上がる。

2階に向かっていると色々とプリントを持った東さん登場。

多分今日も同じなんだろうなあと思いつつ、

「こんにちはっ」
と挨拶すれば

「……………こんにちは。」

やっぱりそつかあ。変わらないや。

東さんの腕から一枚抜けて落ちた。

祐希はそれを拾い渡そうとしたが…

その内容を見て全てが分かってしまった。

そして、

「この図は何かのグラフ…？ネットワークのような…。でも所どころによって途切れている…。自己進化の過程？」

周りからみればただのグラフ…その証拠に箒は頭の上に？を浮かべている。

だが、そのつぶやきに東は見逃さなかった。

「…！？…君、分かるの？」

「えっ、…まあ、なんとなく？なんかひらめいたから、つい」

東さんの気迫に押された！

祐希に軽いダメージ？

「じゃあじゃあ、これはどうかなっ？」

東さんの気迫上昇中？

「これは、言語認識プログラムが神経接続？その先は…脳？さっきのネットワークのようなものの通信かな？」

「凄いよ君、君も天才だあ？ 君の名前はっ！」

東さんは以前の無関心な対応が一変した。

当然その対応ができる訳なく、

「ゆ、祐希。久遠祐希です…。」

少し噛んでしまった。

「祐希ちゃんかあ…うん！ゆうちゃんに決定！いつでも来ていいよ。」

愛称が決まった！興味の対象となった瞬間だった。

「姉さん、…祐希いつも遊びに来てるけど。」

「えっ、そーなの。まあ、いつか」

「はあーっ…」

落胆する筈と祐希だった。

まだこの時2人はこのさきの未来が予想できなかった。

一話 興味の対象（後書き）

今回は和利夫さんのを引用しました。

オリ主と東さんを結ぶのはこれしかないと思いました。

ここから数話は和利夫さんのを引用していききたいと思います。

二話 助手依頼（前書き）

テスト前なのに執筆する・・・
勉強嫌いじゃないけど、飽きた。

二話 助手依頼

東さんとの出会い？から数年。私は普通に過ごしていた。もちろん、第ちゃんの家にも遊びに行ったりもしていた。その度東さんも出迎えてくれた。

そしてその時が来てしまった。

宇宙空間での活動を想定されたマルチフォームスーツ・・・

『インフィニット・ストラトス』・・・通称『IS』だ。

最初は注目されなかったけど、（東さんは学生だったため注目された）その後起きてしまった

『白騎士事件』で一躍注目されるようになった・・・兵器として。

しかもISは「女性にしか扱えない」から各国で女尊男卑が進んでしまった。

あれから数ヶ月、私はいつもどおり暮らしていたけれど・・・

「祐希いー。電話よー。」

一階から母さんの呼ぶ声がした。私は読みかけの本を置いて部屋から出た。

「誰から?」

「それがねえ、分からないのよ。ただ、『祐希ちゃんいますか』ってしか。」

誰だろう?と思った。私に電話をかけてくるのは篝ちゃんか一夏くんしかかけてこないから。
そう思いながら母さんから受話器を受け取った。

「もしもし?」

「...もしもし、ひねもす?」

...ああ、あの人しかいないと思った。電話をかけたらいつものセリフ、これは...

「東さん?」

「はあくい。みんなのアイドルっ、篠ノ之東さんだよーっ!!」

このタイミングでっ!? まあいつか。取り敢えず...

「何か要件があるんですか?」

「うんうん、ありあり、超アリなんだよーっ!! 取り敢えず家の前にいるから出てきて出てきてっ!!」

「はあーい。じゃ、今すぐ...」

「それとっ。今日は泊り込みで来てくれるかなあ？いいかなあ？」
ダメだ、これは「必ず泊まってね！」って言っているようにしか聞
こえない。

「はあ、分かりました。少し待っていてください。準備しますから。」

「うんうん、束さんは律儀な子は大好きだよ？」

なぜ疑問形？と思いつつ受話器を置いた。

「母さん、友達の家泊まりに行ってもいい？」

泊まるなら申し出をする。これ小学生の鉄則。

「いいわよ。迷惑かけないようにね。」

すごいあっさりだ。こんなところがいいのかもしれない。

「分かった。行ってきます。」

私は準備をして、家をでた。すると目の前に束さん。

「きたきた、じゃあ行こっか！」

言われるまま私はついて行った。

数十分後、ある建物の前に到着。ここは・・・？

「ここはねー、私がISを開発した場所、『倉持技研』だよっ！」

ここがISを開発した場所かぁ・・・って私が来る場所じゃないよね。

「私がゆーちゃんを呼んだのは、私の助手になって欲しいからなのだっ！」

うん、よく聞こえなかった。

「・・・え？」

「だから、私の助手になってほしいのだっ！」

うわー、いきなりだよ、いきなり。

「なんで私なの？」

「頭がいいからだよ？」

疑問形返しは止めましょう。

「だってゆーちゃん、全国模試いそグフツ！」

「言わなくてもいいでしょっ!?!?こんなところぞっ!?!?」

「(・・・!コクコク)ぷはっ。ゆーちゃんひどいつ。ちーちゃん顔負けのアイアンクロー・・・!どこで習ったの?」

「千冬さん本人。」

こんなこともあるのかと私は習っておいたっ！これから先も使おう、うん。

「取り敢えず入ろう、そうしよう！」

「はい．．．」

何か上手く乗せられたような気がするけど行こう。聞くことも沢山あるし、なぜ私なのかも聞こう。そう考えながら足を進めた。

二話 助手依頼（後書き）

今回は特に引用しなかったと思う。

次回はシートさんの作品で出てくるあの人が登場するかもしれない。
倉持技研[®]でわかると思います。

三話 AI（前書き）

テスト一日目が終了。

気休めに投稿。

オリ機体のデータ収集集中なので感想などで意見を入れてくれると助かる。

今回はシートさんから一人登場します。

倉持技研〃この人です。

ではどうぞ。

三話 AI

取り敢えず倉持技研の中にある応接室に入って休憩中。私は束さんの真理を知るために聞いてみた。

「で、もう一度聞きたいのだけど、何故私なの？」

「もう、だから「頭がいいから」って言ったでしょ？全国模試一位のゆーちゃん？」

うわぁ、案の上の返答。

ちなみに一位は一位でも二位と50点差以上の差を付けての一位。これについて私の学校は順位を配らないなどの対策をしていたらしい。これは文部科学省の目にもつき、後日IQ検査をした。

結果、IQ180。小学生の頭脳じゃないっ・・・と私自身思った。とゆーか、なぜ束さんは・・・

「知ってるのかでしょ？私に知らないことはないのだよ・・・！」

この人は相手の考えることが分かるのだろうか。私も欲しいなあ、うん。

「まあー、それはおいといて。この束さんが作ったISは女性しか使えないのは分かるよね。いずれゆーちゃんも乗ってもらってから助手になってほしいとおもったからさあ。」

乗るのは確定ですか・・・でも、乗りたいとは思ってたけどね。

「それでねー、あといつくんを守って欲しいんだよねー。そのためにゆーちゃんに専用機を作るの。それでゆーちゃんも手伝ってもらうんだ。特にAIやOS中心にねー。」

ん？なぜ一夏くん？

「それはっ、ゆーちゃんが仲がいいからだよっ」

二度目だ。心を読まないで欲しいなあ。でも専用機を作れるのは嬉しいなあ、と思ったりする。

「それでゆーちゃんは協力してくれるかな？」

うーん、どうしようかなあ。

「はい、お茶を持ってきたわよ。ん？あなたは東ちゃんのお友達？」

ドアが開きお盆をもった白衣の女性が来た。その顔立ちはとても若く、一言言つなら『美人』。

「奈々さんありがとー。この子は私の親友だよっ！」

「久遠祐希です。おじゃましています。」

「あらあら、可愛らしい子ね。この子が祐希ちゃんね。私は水城奈々よ。奈々さんでいいわ。よろしくね。」

ここから、少し備考モード。

水城奈々 倉持技研最高責任者。倉持技研は奈々さんの夫が支援

している。(夫についてはシートさんの作品にて。今後出てくる可能性有り。)

年齢は40代と言っていたが、どう見ても20代にしか見えない美貌である。

ちなみに料理の腕は確かである。

以上

「祐希ちゃん、そんなに焦らなくていいからゆっくり考えていいわよ。私も最初は驚いたのだから。」

言われたとおりだ。ゆっくり考えることにしよう。私は貰ったティークップを傾けながら頷いた。

それからそれから、あれこれと30分ほど色んなお話をした。

「さてとっ、ゆうちゃん、奈々さん、研究室に行こっか？ゆうちゃんはまだ答えられなくてもISみたいでしょっ！」

正直私はISを見たかった。さっきの話は拒否してもまだ。だから……

「見せてくれるなら見たいですっ！」

「よろしい。素直な子は束さんは大好きです！」

「あらあら、お姉さんぶっちゃって。可愛いわねっ」

奈々さんは微笑みながら言っていた。

「むう、奈々さん痛いところを．．．。」

さすがの束さんもお手上げみたい。

早速私たちは研究室に向かった。白い壁、白い床の廊下を歩いて到着っ！20秒。意外と広い。束さんはコンソールの前に立ち常人にはありえない速さで何か打っている。パスワードかな？と思っていると終わったらしい。

『パシユッ！！』

ドアが開き私たちは中に入って薄暗い中を中央にある「物体」に向かって歩いた。着いたとたん部屋の明かりが付いた。

灰色の機体が鎮座している。そのシルエットはまだ研究中！という雰囲気。私は思わず、

「ISS．．．。」

とつぶやいた。束さん、奈々さんは私を見て微笑んでいる。どうも私の顔に興味津々．．．

「って、近いんですけどっ！」

「あっ、ごめんごめん。つい見とれちゃって。(てしまって)」

仲いいなあと思いつつ、聞いてみることにした。何を？決まってる。

「触っていい？」

二人は顔を見合わせ、「うん。」と少し考えていた。そして、束さんが

「これはちよつとね。ISはね国家機密でもあるから普通の人が勝手に触っちゃいけないんだあ。でもねでもねつ、この倉持技研の研究员、つまり私のお手伝いの件をOKしてくれたらだいじょうぶなんだよっ！」

やっぱりそうきた。でも私はこれを見た瞬間決めていた。

「うん、私は束さんのお手伝いをするっ！．．．でもお母さんとお父さんにも言わないと．．．。」

「そうよねえ。流石に小学生が決めてもいけないからね。じゃあ、一応仮契約の段階で進めましょうか。政府も祐希ちゃんのこと承諾してくれるだろうしね。両親には明日説明しましょうか。それでいい？祐希ちゃん。」

それは妥当だなあ。政府が承諾してくれても契約していなければ条約違反になっちゃうだろうし。

「分かりました。お願いします。」

「じゃあじゃあ、触っていいよっ！」

私は恐る恐る近づき．．．触る。

その瞬間あらゆる情報が流れってくる。

「コア・ネットワーク・・・接続未設定。ハイパーセンサー・・・構築中。P I C < パッシブ・イナーシャル・キャンセラー > ... 構築中。シールドバリアー、及び絶対防御・・・構築中。ワンオフ・アビリティ < 単一使用能力 > ... 構築中。初期設定プリセット・・・未設定。拡張領域無しパススロットの為、後付装備アイコンイザ・・・未設定。e t c ...

・・・コア・ネットワークA I システム、「久遠祐希」による設定の為、未設定。e t c ...」

・・・何故A I システムは私が設定する事になっているのかなあ？
前々から考えていたのかなあ？

「ちなみにね、ゆうちゃん。この子のA I システムについてはゆうちゃんに設定してもらおうとI S を『開発したとき』からかんがえていたんだよっ！」

やっぱり・・・。

「なんでそんなときから？」

「面白そうだからさっ！」

きました根拠なし攻撃。私は落胆というダメージを・・・

「でもねでもねっ、全国模試はI S が発表される前でしょ？採点が終わった瞬間、私の全情報収集能力を行使してゆうちゃんのデータを得たんだ。そのとき私が決めただよっ。」

受け流した。とゆうか東さんには尊敬しかない。どんな情報収集を

したんだろう？

「それでそれで、AIの開発してくれるかなあ？」

私は少し考えたが、言うまでもない。答えはこれしかない。

「．．．やります！私はISをもっと知りたい！」

「じゃあ、私とISの基礎から学びましょうか。わからなかったらなんでも聞いてね」

「はい、わかりました。」

「東さんは新しいISを作ろつと」

その日はIS漬けになったことは言うまでもない。

三話 AI（後書き）

シートさんの「verweiledoch, du bist
so schön」より水城奈々さんを引用しました。性格が
いまいち再現しにくかった。駄作で申し訳ないです、シートさん。

本編にはあと2〜5話（大まかですみません）かかると思います。

前書きでも書きましたが、感想をお願い致します。

四話 最年少の研究者（前書き）

テストなんて知るものか。

適度にやればそれで良し。

それではどうぞ。

四話 最年少の研究者

倉持技研で泊まった次の日、私は一旦報告のために家に帰ることを決めた。束さんの助手、もとい倉持技研に所属することになるため、奈々さんが同行してくれることになった。

一方、残って開発するといった束さんは

「ほいほいっと。そして次は . . . 。」

現在絶賛作業中。天才と言われるだけの技術力もある。空中投影パネルを3つ浮かべ並列作業をまるでマシンガンのようにこなしている。

「それにしても、ゆうちゃんは行動力があっていいね。それと昨日の学習力には驚くなあ。」

昨日は奈々さんとゆうちゃんですISの勉強をしていたのだ。私は新しいISの開発をしていたのだけど . . .

驚愕の2文字以外ありえなかった。ゆうちゃんは奈々さんが教えたこと全てをその場で理解していた。なんとという学習能力、いや完璧な理解力だね、うん。

「そーいや、私がゆうちゃんを誘った理由はなんだったっけ？うん . . . あれだっ！」

時は全国模試終了後。当然その頃の私はゆーちゃんと親しかった。あの時に拾ったプリントを見てあそこまで理解するなら学力も高いはず！．．．そう思っただけであらゆる手段^{ハッキングも}を行使して情報をGET!! 点数が異常だったがそれは気にしない。予想の範囲内だね。IQも．．．予想通り。私並みだね。

しかし、このあと問題用紙の裏に書いてあった情報を見て驚いた。普通は問題用紙の裏なんてだれも記録しないのだが政府は学力に驚いて残してあったのだらう。（問題の解答途中を見るためだらう）

私と会った時のプリントの内容がそのままそっくり書いてあった。しかも改善法まで。その改善法は私の改善法とほぼ一緒だった。ゆーちゃんが何を考えたのかは分からないけどその上から鉛筆でなんども斜線が引かれていた．．．多分漏洩防止だらう。

．．．作りたい。ISをこの子と一緒に。ただそれだけ。この子に私の欲望を実現させるなどといったことはなく、「単純に」作りたい。どこまで極められるかを。

「これから作れるんだなあ」一緒に！そーいえば今頃どうなっているのかなあ？」

久遠家

「それで、祐希はどうしたいの（か）」「

わあ、同時発言。流石私の両親、仲睦まじい。この年になってもら

ブラブなのはどうかと．．．ん？年齢？父さんはよくても母さんは言うとな怒られるなあ、うん。

それはさておき、奈々さんから昨日話し合った事情を説明してもらった。両親は動揺することもなく、比較的リラックスして聞いていた。途中感嘆の声を上げていたけど、それでいいのか両親よ。

「私は．．．なりたい。研究者に。私の手でISを作りたい．．．」

「じゃあ、水城さんよろしくお願いします。」

早っ。また息ピッタリ。どうなんだろうこの夫婦は。

「えーと．．．、本当にいいんですか？」

さすが奈々さん。重要だから念入りに確認してくれる。尊敬します。

「ええ、祐希がやりたいことを見つけたんです。それを助けてやらなくて親とは言いませんから。」

嬉しかった。私は世界で一番いい親を持っている。父さん、母さんのためにも頑張らなきゃ！奈々さんは両親の答えに対して

「分かりました。では正式に久遠祐希ちゃんを研究者として迎えます。それと給料についてですが．．．」

「ああ、それなら祐希の口座を作るのでそこをお願いします。」

「えっ、いいの父さん？」

そりゃそうだ、小学生にお金を渡すようなものだから。

「おう、祐希が頑張つて得るお金なんだ。研究にでも使えばいい。家族の分は父さんが働くから大丈夫、心配ない。」

嬉しいことに限りない。だから私は、

「分かった、ありがたく使います！」

「おう、頑張れよ祐希。それと水城さん、質問と意見があるので……。」

「はい、なんででしょうか？」

「学校は今まで通り通えるんでしょうか？」

「はい、それについては政府に承諾してもらい、世間に研究者になったことを伝えないよう配慮してもらいます。」

「分かりました、それと本人の希望に応じて昨夜のように泊まらせてもらってもいいですか？夜中に帰宅させたくはないので。」

「はい、もちろん構いませんよ。あとほかの小学生のように普通の生活を遅らせるよう配慮します。」

「有難うございます。それでは祐希をお願いします。」

「分かりました。ではお邪魔いたします。」

こうして約1時間に渡る契約が終わった。それにしてもどちらにも泊まれるのは嬉しい。研究所が校区内でよかった。

「じゃあ、父さん、母さん、研究に行ってきます。」

「ああ、無理しないようにな。」

「迷惑をかけないようにね。それと、いつでも帰ってきますい。」

「うん、ありがとうございます！行ってきますー！」

「」「いってらっしゃい。」「」

そして倉持技研へ歩いた。空は昼間なのでとても明るく、雲ひとつなかった。

「いい親持ったわね、祐希ちゃん」

「はい！そして自慢できる両親ですー！」

「じゃあ、束ちゃん待ってるだろうから急ごっかー！」

「はいっ！奈々さんー！」

研究室

「出来たああ！これがああ・・・ゆーちゃんの専用機の装甲だああー！」

研究室の真ん中に鎮座していたIS。まだデータ入力は終わって
いなかったが装甲が完成していた。その配色は白主体の黄色のライン。
装甲はとてもしャープなラインで形成されていた。

まるで『天使』のように・・・。

四話 最年少の研究者（後書き）

長かった。勉強、本気でやらないと終わらない・・・！
頑張ろう。

次回はIS学園試験前まで飛びます。
感想よろしくお願いします。

五話 白董くシロスミレく（前書き）

テスト終了！

テストの詰めは見直しではなく機体構想を練っていました（笑）

ネーミングが難しいのなんの・・・誰か知恵を！

ではどしどし。

五話 白董くシロスミレく

アタシが研究者になって数年の時が過ぎた。今の私は高校受験生。周りは日々勉強に取り組んでいたけれど、アタシは全くと言ってもいいほど勉強していない。

なぜか。

『IS学園』を受験するからだ。

アタシは小学生の頃からISの研究をしていたものだからほかの受験者より豊富な知識、それと研究するたびに試運転もしていたため操縦技術も自然と付いてきた。もちろん、普通の教科も入学すれば勉強する。

でも、勉強する必要がない。小さい頃から理解力と記憶力、柔軟な発想力はずば抜けていたから教科書を軽く読み返すなどをすれば問題はない。

ということで私は自分自身に感謝しながらISの研究をしていた。現在10時。しかしアタシは度重なる徹夜ですぐにも寝てしまいそうだった。すると手元にあったケータイが軽快なりズムを奏でながら電話を受信したことを告げている。その液晶パネルには見慣れた人物の名があった。

『篠ノ之 篤』

アタシは頑張っつて腕を伸ばしボタンを押した。

「もすもす・・・？」

「もす？元氣無いな祐希。ちゃんと寝ているのか？」

「ん、寝てないよ。只今絶賛3日連続徹夜中」

「おいおい、大丈夫なのかそれで・・・？まあ、それはおいといて」

おいとくのっ！と心の中で突っ込むアタシ。

「それで祐希は何処を受験するんだ？」

「え、知らないの？」

「知らないぞ」

そりゃそうだ。教えてないんだもん。

「ん」と、IS学園」

「本当かつ？そうかそうか、よかつたあ・・・」

「なんで？」

「知っている人がいると安心するからな」

「まあ、それもそーだねえ」

アタシも周りが知らない人ばっかだったら孤独で死んでしまいそう
だ。いや、兎じゃないけど。

筈がIS学園に入学するのは当然だろうとも思っていた。なにせ

実の姉がISの開発者』だからだ。

「でも、また篝ちゃんと生活できると思うとアタシはとても楽しみになってきましたよ？」

「私もだぞ祐希。しかしいつ受験なのだ？」

「明日だよ」

「ええっ！？ごめん、こんな時に掛けてしまって・・・」

「謝らなくていいよっ、むしろこんな時に掛けて欲しかったよ」

「え？」

「アタシは篝ちゃんとこーやってお話するのがとても楽しいから。それに篝ちゃんに会えるならこのくらいの試験どーってことはない
「！」

「このくらいの試験って・・・でもありがとう、祐希。じゃあ、またな。こんどは・・・」

「「IS学園でっ！！」」

「「・・・フッフ、じゃあまたね（な）」」

通話を終えたアタシはケータイを机に置き、ベットに身を投げ、仰向けになった。

「・・・でも、実際は合格したようなものだけだね」

実際のところ私は束さんから強制入学．．．ゴホッゴホッ、推薦をもらっていた。でも非公式なもんだから出向かなければならなかった。IS学園の試験にはISの試験稼働・教員との実践も含まれている。束さんはそこで私の専用機を渡すらしい．．．「ゆーちゃんにはいっくんと篝ちゃんを守ってもらわなきゃ！これはそのための剣だよっ！」のことだ。

あれ以来私はあの機体と会っていない。どうなっているのかとても楽しみだ。

次の日アタシは試験会場にいた。しかし専用機を貰うので最後になると千冬さんから連絡があった。束さんが教えたのかな、きつと。そんな訳でアタシは施設を暇つぶしに回っていたのだけど．．．

ありえないことが起きた。ある待機室になぜか一夏くんがいる。しかもISが反応している。

「何やってるの？一夏くん？」

「祐希．．．動いてしまった．．．ISが」

この瞬間束さんが言った「いっくんを守ってね」の意味が全て分かった。

「はああああああ．．．」

色んなこともあり最後のアタシの番になった。放送で指定された待機室に向かっている。

「ここかなあ？」

扉をひらくと二人の影が見え、その奥に『物体』がある。

「やっと来たか。祐希。」

「やあやあ、ゆーちゃん！久しいねえ〜。実際に会うのは何年ぶりかなあ？」

黒いスーツをピシツときめた黒髪の織斑千冬さんとうさみみ力チユーシャをつけた篠ノ之束さんがいた。

「さっきは一夏がすまなかつたな。．．．あとで罰を与えるとしてよ。う。」

「．．．ほどほどにしてくださいよ？」

「わかっているさ、冗談だ」

全然冗談に聞こえないのは何故だろうか？

「ふっふっふ．．．ついに完成したよ！ゆーちゃん専用ISS！その名は．．．^{シロスマレ}白董！」

束さんが言った瞬間、後ろの『物体』にライトが当たった。

「白蓮・・・」

アタシは思わず呟いた。その機体の美しさに・・・

五話 白董くシロスミレく（後書き）

祐希は和利夫さんのツバメさんを引用しています。唯一の違いは転生者でなく、中身も女の子というところです。

今回は白董の戦闘描写を書きたいと思います。

六話 初対戦（前書き）

そのまま流れて書きました。

ではでは。

六話 初対戦

白董・・・そう呼ばれる機体はとても美しかった。

機体は白で構成され、比較的シャープなこの機体に黄色のラインが入っている。

白董・・・花言葉は『誠実』。その意味は機体に合っている。何より動きを邪魔とする部分が見当たらない。アンロック・ユニットであり、機体の推進力として使われるウイングスラスターも白主体の輪郭が黄色のラインで構成され、それは天使の翼として見れる。

「それではゆーちゃん、フォーマットとフィッティングをはじめよつか！」

「さて、束。」

「なにになに？ちーちゃん」

「あいにくだがこのアリーナは使用時間が決まっている。時間が無い。仕方ないが祐希には実践でもらうしかない。」

「なんだとお！？」

「そっかー。まあゆーちゃんならできるさ」

他人事のように言ってくれるなあ。まあ仕方ないかな、うん。

「わかりました。できるだけ頑張ってみます。」

「ゆーちゃんには期待してるよ！」

「すまないな、祐希。頑張れよ。」

「はいっ!!！」

アタシは白董を展開してカタパルトへと移動した。後は相手の準備を待つだけ。取り敢えずどんな機体なのかな？そう思いアタシは機体のスペックデータを表示した。

コアナンバー003 . . . 白董 初期設定
武装 . . . 近接ブレード×1 ハンドピストル×2

機体詳細は初期設定の為開示できません。

「やっぱり初期設定のままだとダメかあ . . . 。出来るだけ動いてフィッティングを円滑にしないと . . . 」。

「試験を開始します。受験者、久遠祐希さんはアリーナに出てください。射出タイミングを譲渡します。」

「はい、では行きます！」

心地よいGが身体にかかる。最初は苦手だったがもう慣れていく。アタシは5秒と掛からず上空にでた。

「それでは機体テストを行なってください。自由に動いて構いません。」

アナウンスを聞き、ターンや急上昇、急下降など基本動作を行なった。やはり専用機というだけあり、思うように動いてくれる。

「では、実技戦闘を行います。相手はIS学園教師、山田真耶先生です。」

「久遠さんですね。よろしくお願いします。」

「はい、こちらこそ。」

「では・・・始めっ！」

試合開始のブザーが鳴った。

「よし、行きます！」

「どうぞー！」

キーンー！！

開始早々、アタシと山田先生は近接ブレードを展開、加速して競り合いとなる。ちなみに山田先生はラファール・リヴァイヴを使用している。

「さすがですね、久遠さん！無駄がありません！」

「ありがとうございますっ！」

そう言いながらアタシは空いている左手にハンドピストルを展開。競り合いながら撃ちまくる。

「くっ！やりますね、でもっ！」

山田先生は即座に反応して左肩のシールドユニットを前にせり出した。同時に右手の近接ブレードを収納、アサルトライフルを展開し反撃してくる。

ダダダダダダダ！！

ほとんどの弾がアタシのシールドバリアに当たる。

ダメージ67、シールドエネルギー残量、733。実体ダメージレベル低。

「くっ！！（まだシールドエネルギーはあるけど長期戦はやばいかも・・・接近戦に持ち込もう。）」

アタシは銃弾をランダム回避で避けながら突っ込んだ。しかし、それが甘かった。

「近づきすぎですよっ！」

叫びながら山田先生はアサルトライフルを収納、両手にハンドピストルを展開し連射してきた。

「っ！きゃあああ！！（このままじゃ終わってしまう・・・！）」

ダメージも今ので重なり、シールドエネルギーも半分までなくなる。

誰もが山田先生が勝つと思っていた。だが・・・

フィッティングが完了しました。一次移行ファースト・シフトを行います。

「（待ってたよ！白董！）」

アタシは囷にハンドピストルを両手に展開、銃弾の嵐に投げ、小爆発を起こさせた。山田先生もこれには驚きダメージを食らった。

高粒子圧縮エネルギーシールド展開。

その瞬間、私は目の前が真っ白になった。

目を開けると周りは曇一面。上には青い空が広がっていた。

その雲の上に白いワンピースの一人の少女がいた。アタシはその子に向かって歩いた。

「あなたは誰？」

私は唐突に尋ねた。その少女は振り向き笑顔で答えてくれた。

『私はあなたのIS、白堊の制御人格！』

「あなたが？アタシは久遠祐希！よろしくね・・・名前は？」

『私には名前がないの・・・だから名前を付けてくれない？』

「そうねえ、ん〜と。スマレってどう？呼びやすいし、白堊だからね」

『うんっ！ありがとう！よろしくねっ！それとこの世界から出たら私とはプライベート・チャンネルで会話できるよ！』

「分かったわ。そういえば一次移行って終わったの？」

『うん！たつた今終わったよ！それじゃあ・・・』

「『行こっか！』」

「ここはビット。今は千冬と束しかないが。」

「ほう、ハンドピストルを投げ、煙幕がわりにしたか。」

「さすがゆーちゃん！それに一次移行が始まったね！」

ビットや山田先生からの視点で見ればそれは不思議としか言いようがなかった。

通常よりも強固なシールドバリアを張り、そのバリアにはIS関係の語句がまるで中を見せないように流れていた。

「これは・・・コアナンバー003の効果か？」

「うーん、よくわかんないね。あのコアはゆーちゃんが調整していたからね。面白いからそれで十分だよ、東さんは！」

「・・・はあっ」

呆気ない回答にため息をつく千冬だった。

「どーやら、終わったみたいだね。ちーちゃん」

「そうだな、ここから見物だな。」

煙がほとんど消えた先に白堊は居なかった。誰もが驚愕していたが、ひとつの影がありその先を見上げる。

太陽に被っっていてそれは『天使』だった。

ウイングスラスターが初期設定から、より天使の翼のように曲線を描いていた。その翼には羽の代わりにビットが付いている。

さらにウイングスラスター上部にアタッチメントが新たに付き、そこには二本のソードが装着されている。

「山田先生・・・遅れました。いつでもOKです!」

「はいっ!それでは行きましょう!」

「行きますっ!!(スマレ、最大出力!同時にショートソードを両手に展開してっ!)」

『オツケー!任せて!』

白董は初期設定の2倍ほどの加速をして突っ込む。そして、山田先生の横を通り過ぎる。

山田先生はその加速に追いつけず、また通り過ぎた衝撃が襲う。

「くっ!!(なんて加速力!これは第三世代トップレベルでしょうね・・・。)」

通り過ぎた瞬間白董は反転し、ショートソードを投擲する。

それはまとも当たりシールドエネルギーが削られ、一瞬怯む。

その隙を見逃さずウイングスラスターから二本のソードを取り、切りつける。

しかしそれを予測していた山田先生は後ろへ下がり、ハンドピストルからアサルトライフルに換装して撃つてきた。普通ならばよけることができない．．．だがそれは「普通なら」だ。

「（スマレ！シールドビットをショルダー・シールドモードにして両肩装着！）」

『分かった！シールドビット、展開！』

一瞬にしてシールドを形成。全弾を防ぐ。当然、山田先生は．．．

「そんなっ！一瞬にして!?!」

という反応をする。だがその反応が勝負を決めた。

シールドは肩に付いている。つまり両手にはソードが握られている。

「今だっ！」

キーン！キーン！

重い斬撃が山田先生を襲い、そして．．．

「試合終了、勝者・・・久遠祐希」

六話 初対戦（後書き）

初めての戦闘描写でした。
疲れた。

感想お願いします。

七話 SunLight Drive System<ソルドライヴシステム>

機体設定にハマってしまいました。

しかし今回出るSLDライヴはネーミングに悩みました。

命名理由は単純ですけど。

それではどっぞー！

試験が終わったアタシはビットへ帰還し、ISを解いた。そこには既に千冬さんと東さんがいる。

「ご苦労だった。まあお前はどこかの馬鹿者の仕業で強制入学だな。入学までの間気を抜くなよ」

そういえばそうだった！もうちょっと気楽にやればよかったなあ……。でも帰ってきていきなりその発言はやめてください。あなたは鬼ですか？そもそも一夏くんにも同じ態度とつていますけど私にはどう見てもブラコン……

「今私の悪口を考えてたな？……次は特別組手をプレゼントしようか？」

前言撤回。申し訳ありませんでした。

ユウキ……。私はAIなのに織斑先生？から威圧感を感じるんだけど……

ほんと？……AIにも伝わってるってヤバくない？

そのうち私の存在もバレるんじゃないかなあ？

それはないでしょ。

.....。

.....。

「「ありえそつだっ!」「」

「ん〜ちーちゃん、ゆーちゃん終わったばかりだから休ませてあげなよ、ね?」

「?!.....そうだな、これぐらいにしておこう。それにしても祐希、動きが良かったじゃないか。」

「うんうん、束さんにとっては満足したよ〜。『アレ』は十分使えるね!」

「はい、アタシも初めて搭載したISに乗りましたが『アレ』は実践で十分使えますよ。あとちょっと微調整をして.....」

「おい?アレとはなんだ?」

千冬さんはアタシたちの会話に出てきた『アレ』の意味が解らないように質問してきた。

「『アレ』とはですね.....正式名称SunLight Drive System.....通称SLドライブソルトライヴです。」

「聞いたことがないな。どんなシステムなんだ?」

「はいはい！それは私に任せてちーちゃん！厳密に言うとシステムよりエネルギー機関なんだけどね。これはね『自由に粒子を生成する』機関なんだよ。」

「自由に？どついうことだ？」

千冬さんは頭を傾げる。

「それはアタシが説明します。これはアタシが考えた理論で束さんと開発した粒子を制御する機関なんです。『自由に』とはですな簡単に言っちゃえば『粒子の増幅を任意で可能にする』ことが出来るんです。他にも粒子を圧縮・収束して高濃度にするとかが出来ます！」

「．．．それはいくらなんでも異常ではないか？」

「でもねでもねっ、ちーちゃん。これには欠点の一つに生産がゆるちゃんと私しかできないんだ」

実際この機関はまだ発表していない。というよりまだ欠点が沢山あって発表できないんだけど。その欠点に機関を構成するための物質が入手困難というのもあるんだけどね。

「なるほど、だからあの加速を実現でき、どこにも例が無かったのか。納得ができるな。しかしなんで『太陽の光』なんだ？」

納得してもらえて良かったです、はい。ネーミングはねえ．．．

「放出される粒子が太陽の様に輝いていて、名前決まってなかった

からです。」

「・・・さて、これで入試の全日程が終了した。今日もこれで終わりだ。東、祐希。今日はもう帰ってもらって構わない。それと祐希、学園では織斑先生と呼ぶように。分かったな？」

ええ、聞いておいてシカト!? それはないでしょ。でも疲れたしね。早く帰りたいね。

「はい、分かりました。じゃあ千冬さんお疲れ様でした！」

「じゃね、ちーちゃん!」

「ああ、お疲れ様」

アタシと東さんは途中公園に寄って帰ることになった。

「それにしてもゆーちゃん、あの飲み込みの早さに東さんはびっくりだよ?」

「フフッ! ありがとー! ございますっ!」

「そうそう、これ。今日の戦闘でのSLDドライブの改善点をまとめといたから、使って!」

東さんは一つのメモリースティックをアタシに差し出してきた。

「えっ、いいんですか！じゃ、遠慮なく使わせてもらいます。」

「全然オツケーだよっ！その代わり『紅』についてのデータを端末に送るから、感想と改善点を出してね？」

「はい、もちろんです！」

「じゃあゆーちゃん、またねっ！」

そう言つて東さんはものすごい速さで去っていった。絶対、ISF
けてるな。

ねえユウキ？

なあに？

篠ノ之博士って何者？

天才だけど、千冬さんの言葉を借りるなら「馬鹿者」じゃない
かなあ？

ああ、なんか理解できるよ……。

そうだねえ……取り敢えず帰ってお話しながら再調整しよっ
か。まだまだだしね。

うんっ！了解！

もう空は赤くなり始めていた。

七話 SunLight Drive System<ソルドライブシステム>

もうそろそろ本編に入れそう・・・かな？
次の次に入ると思います。

感想をお願いします。

設定（前書き）

取り敢えずまとめてみました。

設定

久遠祐希 くよんゆうき 15歳 女の子

和利夫さんのIS 〈Blue Swallow〉、主人公八雲ツバメをモチーフにしている。

違いは転生者ではなく、中身も女の子であること。

髪は黒に近い紺色。長さは楯無さん位。

小学生で倉持技研研究者登録。理解力と記憶力、発想力に長けている。運動神経も代表候補生並みでISの操縦については度重なる試験稼働でトップレベル。SLDライヴなどを開発し、戦術も作り上げている。

一夏と箒、鈴と親友でそれぞれ「一夏くん」「箒、箒ちゃん」「鈴ちゃん」とよぶ。

コアナナンバー003・シロスマレ白董 第3世代型試験機 現在第1形態

防御・接近戦に重点を置いて開発された高速機動型試作機。カラーリングは白に黄色のライン入り。アンロック・ユニットのウイングスラスタは00のアリオスの背部のウイングユニットを外した状態。その外したウイングの間はアリオスは空洞だが、そこにピットを接続させ翼を再現させている。装甲はミステリアス・レイディ並みに薄い。それによる軽量化で機動性を大幅に上げている。

武装

ロングソード

ウイングスラスタ上部のアタッチメントに装着可能。計2本。ロングとあるが大きさは雪片式型・雨月・空裂並みの大きさで、下記のショートソードと区別するため。現在は実体剣。

ショートソード

リアスカートに装着可能。計2本。大きさは〇〇のエクシアのGNショートブレイド並み。現在は実体剣。

ハンドピストル

リアスカートに装着可能。計2個。SL粒子をビームとして発射する。取り回し、連射に優れているが、威力はライフルより低め。

シールドビット

ウイングスラスタに常時装着。計8機。装着時はスラスタとして機能する。SL粒子の貯蔵をすることができ、ある程度なら自立移動が可能。表面にビームシールドを展開できる。貯蔵している粒子がなくなりかけると、ウイングスラスタで補給される。ビット間での接続枚数により機能を変更する。

1・2枚・・・遠隔操作による展開でビームシールドを発生する。
3枚以上の接続も可能。

4枚・・・ショルダー・シールドモードとなり、肩に装着可能。
操縦者の許可によって他機体にも装着可能。

ビームフィールドモード

シールドビットを8枚展開し、自分の周りにビームフィールドを形成。ただ、SL粒子を消費しやすくなるので自機以外の展開は望ましくない。

補助AIシステム

制御人格が表に出てくる。AI名『スミレ』

武装展開、期待制御などの補助を可能とする。AIとの会話は外部音声、プライベート・チャンネルで可能。待機状態でAIのホログラフィックを投影可能。他設定有り。

オーバーブースト

シールドビットをすべて解除し、貯蔵しているSL粒子+生成したSL粒子を放出する。その間シールドビットはシヨルダー・シールドモード、または両腕・両足に1機ずつ装着し、1枚シヨルダー・シールドを形成して対応する。スミレによる展開も可能。

オーバーブースト時は機動力が格段に上がる。放出したSL粒子はビーム兵器の威力を弱める効果がある。機体は金色の粒子で覆われる。途中解除、限定発動も可能。

設定（後書き）

次は本編です。いろいろ考えてます。

感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6679y/>

IS fusion

2011年12月2日00時57分発行